

は し が き

東南アジア農業技術シンポジウム組織委員長

川 口 桂 三 郎

京都大学東南アジア研究センターは昭和38年4月に発足して以来、現地調査に重点をおいた研究を続けている。研究は人文・社会・自然科学の広範な分野にわたって行なわれているが、その中において農学関係の研究もきわめて活発である。

農学部門における現地派遣者の数は、東南アジア研究センター発足以来今日までの4カ年間にのべ50名に近い。一方、農林省、海外技術協力事業団との共催ですでに次の二つのシンポジウムを行なっている。

1. マラヤ稲作シンポジウム 昭和39年9月30日～10月2日

2. 水資源利用に関するシンポジウム 昭和40年9月17日～19日

これらのシンポジウムの成果はともに和英両文で報告されている。

今回農学関係として第3回目の、東南アジア研究センターとしては第5回目の、本シンポジウムを開催したのは本年度（昭和42年度）がセンターの研究第1期5カ年計画の最終年にあたため、今日までの調査・研究の結果を披露し、討議を加え、たがいの反省と今後の研究方針に資するためであった。このような目的のため、初めはセンターの関係者だけで開催する予定であったが、計画がもれるにつれセンター以外にも開放すべしとの声がしだいにおこり、遂には当センターより御参加を要請するに至った方々も少数ではなかった。

本報告書は昭和42年6月24、25の両日京都市比叡山ホテルにおいて開催されたシンポジウムの成果を論文の形式としてとりまとめたものである。本シンポジウムは上述のとおり、もともとセンター関係者のためのものであり、本報告書も外部へ出すには不備な点も少なくない。しかしながら外部からの要請もあり、とくに東南アジアの農業発展につくすべきわが国の使命とわが国の農学関係者の東南アジアに対する関心がいよいよ高まりつつある今日、これを発表することはいささかなりとも斯界に貢献するところがあると考え、あえて公表するしだいである。